フエニールエチルアルコホルである4)。したがって，ネコに対する誘引物質は1種に限らない。このうちマタタビラクトンはアルゼンチンアリの分泌物から得られたイリドミルメシンとイソイリドミルメシンの混合物であり，イヌハッカの有効成分はネペタラクトンである5)。また目の私信によればオニクの主成分はボシュニアラクトンであり，ミツガシワの有効成分の一つもラクトンである。これらの事はネコの誘引物質は多種であるがその一つにラクトン類があることを示している。有効成分の研究が進むことによって，植物分類学上の形質との関係が明らかになることを期待する。

文　献

1) 元村　勲：動雑 **75**: 108 (1966)　2) 元村　勲：動雑 **76**: 119 (1967)　3) MOTOMURA, I: Sci. Rep. Tohoku Univ. Biol. **33**: 71 (1967)　4) 目　武雄：マタタビの成分. 化学の領域　増刊 No. 74: 71 (1966)　5) 目　武雄：蛋白質・核酸・酵素 **12**: 2 (1967)

Summary

Actinidia polygama Miq., *Boschniakia rossica* (Cham. et Schltdl.) Fedtsch et Flesov., *Nepeta cataria* L. and *Valeriana officinalis* L. var. *latifolia* Miq. have been known as the plants relished by the cat. In addition to those, some gentianaceous plants contain the attractant for the cat3). In the present observation the writer tested the reaction upon the cat to the dry-distillate of 36 species of plants belonging to Loganiales and Rubiales. The results are shown in the table, in which the marks denoted by circle show the plants containing the attractant.

○シコリはアイヌ語である（前川文夫）Fumio MAEKAWA: Sikori derived from Ainu vocabulary

もう十数年前に「シコリの発掘」と題して，ムシカリ，ウシコロシ，ニシゴリ，シケルペニ（キハダのアイヌ名）等の語幹中に共通に存在する Si-ko-ri（シコリ）が或はアイヌ語かも知れないとの可能性を述べたことがある（本誌 **29**: 261-2 (1954)）。そしてこの共通語幹を持つ植物が夫々，スイカズラ科，バラ科，ハイノキ科，ミカン科と全く類縁は遠いが，白又は淡緑の細かい花がかたまって咲くこと，あとに黒色を中心にした小さい液果を結ぶ共通点のあることも指摘しておいた。その後全く手掛りのなく来たところ，偶然のことからそれの正体と思うものが見出された。それはエゾニワトコであった。知里真志保氏の分類アイヌ語辞典第1巻植物篇は貴重な資料であり，前回もそれからの引用もしたのだが，次の点は看過していた。それはエゾニワトコの茎は Sokon-ni というがこれは si-kor-ni から来たもので，その意味は糞＋持つ＋木の幹という意味で

ある。そのわけは茎に悪臭があり，その悪臭に魔を払う力をみとめて呪術用にひろく使われるからであるという。ニワトコは細かい白っぽい花が集まり咲く点も，花後に赤黒い液果が熟する点も亦ムシカリ，ニシゴリの面々とぴったり符合する。呪術に使うとあればアイヌ人と接触をしていた日本人の先祖もまた十分にその影響を受けたであろうことは明らかであり，ましてムシカリの別名オオカメノキが私の説く如くオオガマズミで大神ッ実から来ているとあれば，そこに日本人の祖先が民間信仰としてオオカメノキに対して持っていた信仰の手掛りをも提供することになる。これを整頓すると下のようになる。

1) アイヌ人の臭気を除魔力とする信仰の対象。シコルニ→シコンニ（エゾニワトコ）として残存。
2) 日本人が上記に接触，オオカメノキに導入。今はムシカリという恐らく一部欠損の名となって残存。
3) つづいてさらに南方に波及し，白花平頂の繖房花序，液果の属性の方が重視されて類似形態の植物に名がうつる。それらは原義を喪失し，附会語源的発想にゆがめられてニシゴリ（錦織），ウシコロシ（牛殺）などと変貌して残存。

これらをつらぬくものはシコリ（糞を持つ＝悪臭の木）の語幹である。シコリの分布の一次的な南限はアイヌ分化の南限を画することになるかも知れない。

（東京大学理学部植物学教室）

○北極圏内に見出された4種のケシ（小林義雄）Yosio KOBAYASI: Four species of *Papaver* found in arctic region

極地の高等植物に寄生する菌の研究は従来寄主植物の属の単位で討論されることが多かった。しかし菌群によっては，特に寄生菌では寄主の種類或はそれ以下の Taxa の相異による特別品種 (forma specialis) を考慮する必要も生じて来るわけで，菌の分布を考慮する場合には一層この点が問題となる。極地のケシにつく菌としては従来 *Diplodina papaveris*, *Clathrospora pentamera*, *Pyrenophora paucitricha*, *Py. chrysospora*, *Pleospora scrophulariae*, *Pleospora herbarum*, *Mycosphaerella tassiana* 等が報告されているが，これらは再検討する必要があるし，まだ多くの菌が見出される可能性がある。この意味で極地産のケシにも注目した次第である。

アラスカ極地では *Papaver radicatum* Rottb. が arctic poppy の名で訪れる人に親しまれ，ツンドラ内の arctic heath に普通に見られ，8月はじめには可憐な黄色花が目を楽しませてくれる。次に1966年8月半ばにスピッツベルゲンを訪れた際に山の斜面の岩礫の間に白花をつけるケシを見出した。これは Rφnning の Svalbards Flora (1964) によれば *Papaver dahlianum* Nordh. に当る。しかし Polunin の Circumpolar Arctic